

2009年6月17日

## アメリカのホロコースト記念博物館での 警備員射殺事件についての声明

立命館大学国際平和ミュージアム 名誉館長 安齋 育郎  
館長 高杉 巴彦

2009年6月10日、アメリカの首都ワシントンのユダヤ人虐殺問題に関する「ホロコースト記念博物館」で、黒人警備員が白人至上主義者に射殺される事件が起きました。犯人は、黒人やユダヤ人に対する憎しみを露わにしており、「ユダヤ人虐殺問題の展示施設を警備する黒人」を狙った意図的な犯行ではないかと見られています。

アメリカ史上初めて非白人系大統領が登場し、「反ユダヤ主義と人種的偏見」に対する警戒を国民に呼びかけたばかりですが、アメリカ社会には今なお1000近い人種差別団体があると伝えられており、今回の事件は図らずもそうしたアメリカ社会の断層を垣間見せる結果となりました。

事件があった「ホロコースト記念博物館」は、ナチドイツとその共犯者たちがユダヤ人をはじめとする人々に対して行なった虐殺の非人道性を伝える施設で、1993年の開設以来、毎年約170万人もの人々が訪れています。今回の事件は、今のところ、ジェームズ・フォンブラン容疑者による単独犯行と考えられていますが、同容疑者は、1978年に設立された「歴史見直し研究所（The Institute for Historical Review）」の一翼を担った反ユダヤ主義者ウイリス・カートの影響を受け、「アメリカ社会の金融はユダヤ人によって支配されている」という狂信的な信念を抱き、自らのウェブサイト上でもホロコーストそのものを否定し、ユダヤ人を「西欧文明の破壊者」と激しく非難していました。私たちは、いかなる歴史観や価値観をもつにせよ、事実は事実としてあるがままに受け止めることが過去に対する誠実な態度であると確信しています。立命館大学国際平和ミュージアムは、「過去と誠実に向き合うこと」を基本的な展示原理とし、日本国民の戦争被害だけでなく、アジア・太平洋地域で日本軍が行なった加害行為についても歴史学の研究の成果に立って展示しています。

私たちは、今回の事件について、以下の2つの点に対する注意を喚起します。

(1) 異なる価値観や歴史観をもつ他者を暴力で抹殺することは絶対に正当化されないこと。

平和的な人間関係を育むためには、可能な限り互いの価値観を理解し合い、認め合うことが不可欠です。異なる価値観をもつ他者の命を奪う行為は、それこそホロコーストを正当化しかねない行為であり、決して容認されてはなりません。

(2) 命の大切さを考える場であるべき「ホロコースト記念博物館」において、有無を言わず命を奪うような暴虐が行われることは絶対に許されてはならないこと。

ホロコースト記念博物館、広島平和記念資料館、長崎原爆資料館、南京虐殺記念館など、人類による大量殺戮を展示する博物館は、生命の尊厳性を来館者に伝える重要な使命をもつ社会教育施設であり、人の命を奪うような行為は強く非難されなければなりません。

私たちは、立命館大学国際平和ミュージアムが、今後とも命のかけがえのなさを訴えかける平和教育の場としていっそう有効かつ魅力的なものとなるよう努力するとともに、貴重な資料の保存や調査研究の充実に努めるつもりです。

上のおり声明します。

2009年5月27日

## 北朝鮮の核実験についての声明

立命館大学国際平和ミュージアム 名誉館長 安齋 育郎  
館長 高杉 巴彦

北朝鮮の朝鮮中央通信は、2009年5月25日、「地下核実験を成功裏に実施した」と報じました。同日11時過ぎ、韓国のYTN（ニュース・チャンネル）は、韓国気象庁が同日午前9時54分頃にマグニチュード4以上の揺れを観測し、北朝鮮が核実験を行なった可能性が強いことを伝えました。その後、大統領官邸筋は、地震の規模はマグニチュード4.5、震源は、北朝鮮が2006年10月9日午前10時35分に初の核実験を行なった咸鏡北道豊溪里であることを明らかにしました。また、日本の気象庁は、25日午前9時54分40秒頃、北朝鮮北部（北緯41度、東経129度）を震源とするマグニチュード5.3の地震波を観測したと発表しました。アメリカ地質調査所もマグニチュード4.7の地震波の観測を発表。これらの情報を総合すると、北朝鮮が史上2回目の核実験を実施したことは確実であると考えられます。私たちは、世界が、2010年に開催される核不拡散条約（NPT）再検討会議にむけて核兵器廃絶への希望を培いつつあるこの時期に、北朝鮮が公然と国際世論に挑戦して核実験を強行したことを厳しく非難するとともに、直ちに核兵器の開発・研究・製造を停止することを求めるものです。

今次核実験の爆発威力については、2キロトンから20キロトンに至る多様な推定値が報じられています。一般に、核兵器の爆発威力Y（キロトン）と、それによる地震のマグニチュードMとの間には、 $M=A+B\cdot\log Y$ の関係がありますが、定数A,Bの値は地殻条件等に依存するため、アメリカのネヴァダ核実験場のデータでは $A=3.92, B=0.81$ 、ロシアのセミパラチンスク核実験場のデータでは $A=4.45, B=0.75$ と異なっています。したがって、今次核実験の推定威力は、ネヴァダ方式で5～50キロトン、セミパラチンスク方式で1.2～14キロトンと大幅に異なります。地殻の性質がセミパラチンスクに近いと考えれば、今次核実験の威力は数キロトン程度と考えるのが妥当ですが、アメリカの核問題専門家ジグフリード・ヘッカー教授（スタンフォード大学）は2～4キロトンと推定し、第1回核実験の2～5倍程度と考えています。また、元国防省顧問のセオドア・ポストル教授（マサチューセッツ工科大学）は、北朝鮮は観察された威力の10～20倍の規模を想定していたとし、プルトニウムの爆縮機構に問題があったことを示唆しています。要するに、今次核実験の態様についてはなお不確定な面が多く、科学的究明を必要とする段階であるにもかかわらず、日本のマスコミの一部は「長崎原爆と同程度の威力」などと報じることによって、いたずらに長崎原爆の地獄絵のイメージを誘発し、軍事的緊張感を煽り立てている面があると言わなければなりません。事実関係を慎重に見極めた報道姿勢が期待されることです。

本年4月5日の飛翔体発射に続く今次核実験は、北朝鮮が大陸間核弾道ミサイル開発の面での成果も示すことによって、アメリカとの直接対話の道を打開する狙いがあるものと見られていますが、潘基文国連事務総長は、今次核実験が、「核実験や弾道ミサイル計画に関するすべての活動の停止」を規定した2006年10月の「安保理決議1718」に明白に違反しているとの認識に基づいて北朝鮮を非難するとともに、「緊張を高める行為を自制し、6カ国協議を含む関係各国との対話を再開する」よう促しています。

私たちは、2000年のNPT再検討会議においてアメリカを含む核保有国が「核兵器廃絶への明確な約束（unequivocal commitment）」を行いながら、ジョージ・ブッシュ政権下で開催された2005年の会議ではその約束が反故にされたことを憂慮しています。そして、いま、2010年の再検討会議を前に、バラク・オバマ新大統領が「核兵器のない世界」を展望する姿勢を国際社会に明らかにしたことを心より歓迎するものです。言うまでもなく、核兵器の廃絶のためには、核兵器関連産業の非核産業への転換を含む構造的な問題が存在していますが、私たちは、最大の核保有国であるアメリカ大統領の非核政策への転換

が、広島・長崎市長らのイニシャチブによる「平和市長会議（Mayors for Peace）」の核兵器廃絶構想ともども、来年のNPT再検討会議を契機に人類が核兵器廃絶へと舵を切る上で重要な役割を果たすことを期待するものです。そうした人類史的局面にあつて、北朝鮮が核脅迫外交に踏み入ろうとしていることを強く批判するとともに、そうした方針を放棄し、直ちに非核政策に転換することを求めます。

加えて、私たちは、今回の北朝鮮の核実験が、先の飛翔体打ち上げ実験ともども、わが国の世論を軍事力強化による防衛という方向に傾斜させ、核エネルギーの平和利用を定めた原子力基本法や「核兵器をもたず、つくらず、もちこませず」の非核3原則に背馳する日本の核武装論をさえ誘発しかねないことを深く憂慮しています。私たちは、北朝鮮の軍事的挑発に呼応する日本国内の軍事主義的傾向の強まりが、この国の進路を誤りかねないのではないかと心から懸念するものです。

2010年1月20日

## 中野信夫さんのご逝去にあたって

立命館大学国際平和ミュージアム 名誉館長 安斎 育郎  
館長 高杉 巴彦

2010年1月16日、中野信夫さんが亡くなられました。当ミュージアムの「中野記念ホール」は、中野信夫さんの名に因んでいます。「百まで生きよう会」の代表を務めておられた中野さんは、約束を果たすかのように、百歳でのご逝去でした。謹んで哀悼の意を表します。

ご専門の眼科医療分野をベースに長年にわたって市民のための医療の発展に尽くされた中野さんは、自らのビルマでの従軍体験もふまえて、反戦・平和の市民活動の発展のためにも大変大きな足跡を残されました。1981年、「平和のための京都の戦争展」を呼びかけ、その後の運動の発展に大きく貢献されました。当国際平和ミュージアムは、「平和と民主主義」を教学理念としてきた立命館大学のイニシャチブと、長年にわたる戦争展運動の成果が響きあい、協力しあつてこそ実現したものです。しかも、中野信夫さんは、1992年に当ミュージアムが創設されるに際して多大な財政支援を寄せられ、世界唯一の大学立の総合的平和博物館としての国際平和ミュージアムの開設に、重要な貢献をなさいました。

開設以来18年、当ミュージアムは、常設展・特別展に100万人を越える来館者を迎え、ますます国内外の平和博物館運動の発展のために重要な役割を果たしつつあります。私たちは、中野信夫さんのご厚志を受け継ぎ、未来に豊かに花開かせるためにも、今後とも世界と日本の平和博物館運動のさらなる発展のために、引き続き努力する決意であることを表明します。